

20世紀の始まり（1901～1915）、その5

《鶴見埋立組合の設立》

浅野総一郎は、河川法が成立した1896年（明治29）、ヨーロッパ視察に出かけ、そこで、大型船を岸壁に横付けして直接荷役している状況に衝撃を受けます。当時の横浜港は、大型船が接岸できず、小さな船を使い荷役をしていましたから。

そこで、総一郎は、岸壁から直接荷役ができる工場用地を造成することに立ち上がります。1908年（明治41）、渋沢栄一、安田善次郎の出資を受け、鶴見埋立組合を設立します。（注1）この組合が、埋立地を造成し、京浜工業地帯を形成していくこととなります。

埋立地には、自分と縁のあった人や家紋から、名前を付けています。「大川町」は日本鋼管二代目社長の大川平八郎、「白石町」は娘婿の白石元次郎の姓です。（注2）「安善町」は安田善次郎の略称です。鶴見の末広町や扇町は浅野家の家紋の扇からとっています。

東京の深川で操業していた浅野セメントは、粉塵問題で住民と対立し、1917年（大正6年）に、この埋立地に工場を移転しました。

注1：鶴見埋立組合は、その建設部門が現在の東亜建設株式会社です。会社のマークが、鶴3羽が配された図柄であり、発祥の地「鶴見」と浅野総一郎・安田善次郎・渋沢栄一の「三氏」を象徴しデザイン化されたものです。

注2：白石元次郎が起業したのが日本鋼管です。その2代目社長が大川平八郎です。

写真は、①鶴見埋立組合の臨海部造成当時の地図（今昔マップに細見加筆）、②浅野セメントの貨車に付いていたマーク（扇の形の中に、総一郎が考案した家紋（開きかけた扇を図案化）が配されています。HP「SHOUNAN COLLECTION HAUSE」掲載写真）、③東亜建設工業のマーク（東亜建設工業HPより）

①



②



③

